

やはり俺のモカしか飲まない青春は間違っている。

狐月狗沙狸(黒

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

比企谷八幡くんと青葉モカちゃん
きつと、とつても相性が良くて

それでいて、とつても相性が悪いと思うんです

二人が与える影響によって二人の世界がどう変わるのか
それをこの物語で書いていこうと思います

目次

彼は「友達」が多い	1
彼女は「幸せ」を望む	5
彼は「彼女」を知らない	8
彼女は「彼」に笑みを浮かべる	16

彼は「友達」が多い

カップにチョコレートソースとエスプレッソを淹れて軽く混ぜる。ミルクピッチャーに冷たい牛乳を入れ、マシンでスチームし、軽く泡立ったらエスプレッソに注ぐ。プラスチックのストローを挿してから、トッピングのココアパウダーやホイップクリームなどを乗せたら完成。『カフェモカver八幡』マックスコーヒーの代わりに飲むようになった俺のアイデンティティ。

「おう、美味しそうですね」

「モカ、起きてたのか。おはよう」

「おはよー、モカちゃんも一口貰っていいーい？」

「いいぞ、ほれ」

眠たげな表情でゆったりと喋るモカはストローに口を付けて、喉を少しだけ潤す。細められた目がモカの喜びを示していた。

「うくん、この味ならつぐのお父さんにも負けませんなあ」

「流石にそれは言い過ぎだ、プロにはまだ勝てん」

「ふっふっふ、まだなのかー」

「……おう」

「照れてますなあ」

「うるせえ」

「久々の捻くれですなあ」

「……うるせえ」

「ふっふっふ」

赤くなった顔を掻きながら楽しそうに笑うモカを見る。カフェモカを飲みながら、ふと間接キスだと思った。モカの顔はほんのり赤く染まっていた。

「おはよう」

「おっはよー」

ところ変わって羽丘学園高等部。ぼっちというわけでもなく、朝の挨拶をするぐらいには知り合いもいた。

「今日もメガネ似合ってるねー」

「はいはい、ありがとよ」

「あつ、信じてないなー?」

今井リサ。一年の時から三年間同じクラスで勝手知った仲。ギャル風なのに気配り上手でその上、美人だからモテまくる。クラスのトップカーストの一人で隣の席だ。

「八幡、イケメンで性格も良いじゃん。この前、後輩の子達が薰と八幡のどっちがイケメンかで揉めてたんだよ?」

「瀬田はやっぱり女子にモテるな」

「こら、話逸らさないの」

曖昧な笑みを浮かべておく。引越して羽丘の中等部へ入学するときに俺は結構変わった。猫背気味だった歩き方を正し、眼鏡をかけるようになり、マックスコーヒーをやめた。積極的にはいかなかった。人に事務的な用がなくても自分から話しかけるようにまでなった。それは軽く言えばイメチェンというやつで、重く言えば現状からの逃げだった。俺はあの時の自分から逃げた。あの時の自分を肯定することをやめたんだ。

「もう、八幡もそれだけモテるってことだよ?」

「まあ、嫌われるよりはマシか」

「ん?」

「いや、なんでもない。それよりコンビニに新商品入ったんだって?」

「あれ、モカから聞いたの? そうだよ! オススメはね激

辛のカップラーメン。まだ食べてないんだけど、すごいレビュー良
いから今度三人で食べてみよ☆」

「ラーメンか、良いな。でも、モカは辛いのがダメだから食うなら二人で
だな。放課後にでも寄るか」

「およ、デートのお誘いかな? 嬉しいけどモカを一人にする

気ー?」

「違えよ。モカは今日Afterglowの幼馴染組みでつぐみのもと
この店行くんだと」

「えー、それじゃあアタシはモカの代わり?」

「んなこと言ってねえよ」

「ははっ、わかってるって。じゃあコンビニ寄ってその後八幡とモカのマンションね」

「……別に良いけどよ。流石にモカに一言いつとけよ？」

「はい」

リサとの会話も終わり、授業も四度終わると昼休みに入る。木の周りを一周するように繋がったベンチが俺のベストプレイス。ここで飯を食っていると大体アイツが来る。

「やつほー、八幡くん」

「よう、氷川」

「今日もメガネだねー。でもそれ取った方が絶対るんっ♪ってすると思おうよ？」

そういいながら隣に座ってくる氷川。我らが羽丘学園の生徒会長だが、大抵思いつきで行動するし、天才過ぎる思考回路を持つので周囲の奴らはよく振り回されている。羽沢がその筆頭だ。

「残念だったな、俺は外にいるときは眼鏡取らないんだよ。だからそろそろ眼鏡を外させるのを諦めろ」

「ええー、やだよー。そんなのるんっ♪ってしない！」

「つか、お前の身体能力なら無理やり眼鏡奪えるだろうが。なんだってわざわざ毎回律儀に説得しようとしてくるんだ？」

「そんなのるんっ♪ってするからに決まってるじゃん！　　八幡くんはどーせモカちゃんにしかメガネの下見せてないんでしょ？」

「それは、どうだろうな」

「誤魔化したって無駄だよ！

「ハイハイ、氷川ポテト食うか？」　　それぐらいわかるんだから！」

「えっ、良いの!?　　ありがとー！」

実は今日の昼飯は松原が働いている某チェーン店のセットだったりする。天才を誤魔化すにはこのポテトが最適だ。ちなみに姉の方にも効く。朝のやり取りで弁当を用意するのを忘れていたため、二人で山吹ベーカーリーとファストフード店に寄ってから学校に来たのだ。相変わらずモカはポイントカードの嵐で山吹を苦笑いさせていた。

「……今度、何か買いに行くか」

「何処に行くの？」

「山吹ベーカリー」

「そっか、じゃあいいや」

「じゃあって何だよ」

「んーとね、八幡く『キンコーンカンコーン』ありや、八幡くん昼休み終わっちゃうよ」

氷川の言葉を遮るようなチャイム。こいつが俺と会う時、絶対に他のやつはいない。見ず知らずのやつくらいなら、いたことはある。だからだろう。氷川は大好きな姉ですら俺と一緒にいる時は見つけても追いかけない。氷川は、俺がマンションなら眼鏡を外しているのに、モカがいるから絶対に来ないし、氷川の家にも姉がいるから絶対に俺を呼ばない。

「教室戻るか」

氷川の口元に着いた塩を拭き取って足を動かす。氷川目は艶やかに輝いていた。

「るん♪ってする」

彼女は「幸せ」を望む

昼のチャイムに合わせてるように携帯が鳴り出す。表示された名前はリサさんだった。なんだろう、嫌な予感がする。

「もしもくし、超絶かわいい美少女のモカちゃんです。どうしました〜?」

「あのねモカ、放課後モカたちのマンションにお邪魔することになったんだけど、いいかな?」

ああ、これが。八幡の周りには魅力的な人が多過ぎるのかもしれない。他の有象無象ならともかく、リサさんは駄目だ。八幡と二人きりになんてさせたくない。この人は尊敬できる素晴らしい先輩で、その上家庭的な面や女子力だって申し分ない。少しでも私が『この人なら八幡に相応しいんじゃないか』そう思ってしまうから駄目だ。

「あのですねー、今日はちよつとですねー、うん、ダメです」

「そっかー、もしモカが良かったら三人で夕食にしようと思ってたんだけどね☆」

「え? 三人ですか?」

「そうだよー。八幡はモカが今日蘭達とつぐみのお店に行くから三人では無理だつて言つてたけど、夕飯なら三人で食べれるでしょ☆」

やっぱり、リサさんは尊敬できる先輩だった。気遣いが上手くて、きつと私が誰かと八幡が二人きりになることを嫌がっていることも理解してくれている。

「だったら、いいですよ。モカちゃんはりサさんの美味しい手料理を希望します」

「はーいー。お姉さんに任せなさい。二人は、たまにご飯抜いちやつたりするからね。今日は腕によりをかけて作つてあげる☆」

なんとなく、昔見た夕焼けを思い出した。どうしたつて沈んじやうのが夕日だけど、この陽だまりはいつでもここにある気がして八幡との関係が変わらない限り大丈夫な気がした。私と八幡さえいれば、そこにリサさんがいても、たとえ蘭が来たとしても大丈夫。私の幸せはちゃんとここにあるから。

「じゃあ、また放課後会おうね！」

「はい、また〜」

少し頬が緩むのを感じた。まだお昼ご飯のパンも食べてないし、これからカフェにだって行くのに、夕飯の時間が楽しみでしょうがない。

いつも通りのお昼へ向けて足を伸ばす。仕方がないからひーちゃんで遊ぶことにしよう。

「あ、これだよ！ 八幡」

下のほうにある棚から商品を取る今井。持っているのはカップラーメンだというのに、傾げた首と覗かれる双眸からは僅かな色香が感じられた。揺れるウサギのピアスを見ながら尋ねる。

「今井なんで急に俺達の部屋に来るなんて言ったんだ？」

「あく、それ聞いちゃうー？ ……あのね、二人に話したいことがあるの。ちよつと大切な話。だからモカには夕食を三人で食べようって言つてあるよ。これ、今日は食べれないね」

棚に品を戻すと、さつきと同じ構図で、より影を持った今井が笑う。何故か他人事みたいに、こいつもこういう顔をするのかと思った。

「夕食、今井が作ってくれるのか？ 俺は軽食しか作れないし、モカもちゃんとした料理は出来ないぞ」

「うん、任せといて。美味しきは保証するよ」

「そりや楽しみだ。辛いものとトマト使った料理じゃなけりや、俺もモカも一通り食べれる」

「りよーかい。そしたら和食でいい？ 材料足りないだろうから買いに行くことになるけど」

「ああ、近くのスーパーでいいか？」

「そうだね、じゃあ行こうか」

いつもより落ち着いた雰囲気の中、今井の背中は酷く冷たく見えた。ふと同類なのかと思えて、考えるのをやめる。たとえ、そう見えたとしても同じわけがないんだ。こいつと俺では環境が全く違うんだから。

小さめの里芋を六個、人参を一本、干し椎茸を一パック、他にも蒟蒻、筍、鶏肉。色々な食材をカゴに入れていく今井は先程の暗い様子を潜めていつもの調子を取り戻していた。

「八幡つてさ、トマト嫌いだったんだねー。イメージなかったからびっくりしたよ」

「誰にだって苦手なモンくらいあるだろ。たまたま俺の場合それがトマトだっただけだよ」

「そーだね。でも、八幡つて何でも好き嫌いなさそうだったからさ。人間関係もそーじゃん。誰かが八幡の悪口いつてるのを聞いたことないし、八幡が誰かの悪口いつてるのを聞いたこともないよ」

「そういうのはわざわざ人にいうことでもないしな」

「……アタシ、八幡のそういうところ好きだな」

「俺も今井の自分が気遣いしたいから、人の面倒を見てるところとか好きだぞ」

「……もう、モカに怒られるよ?」

「確かにな」

赤く染まる耳を眺めて笑った。何だか今日はいつもと違う今井をよく見るようだった。

会計を済ませて店を出る。マンションに着くまで他愛もない会話が続いた。話すなら嫌いなものより好きなものだ。今井は筑前煮が好きだそうで、今日の夕飯は筑前煮となった。

モカが帰って来るまでに仕込みをしておくらしい。リサがキッチンに立っている間にカフェモカを淹れて飲んでいた。今朝よりも少味の落ちたそれは今の状況を表しているように思える。コーヒーに余計なものはいらない。甘味のある人生には苦味のやや強いコーヒーが相応しかった。

彼は「彼女」を知らない

食卓に並んでいく品を見て母親のことを思い出した。父親と母親が別居し始めたのがいつからだだったかは知らないが、物心ついた頃には母との二人暮らしだった。父親からの音沙汰こそないものの、両親が離婚していないことは知っていたし、母はいつも薬指に証を残していた。

そんな母の得意料理は和食だった。筑前煮が得意だったかまでは知らないが、決まって和食の日は品物が多かった。主菜に副菜、漬け物に汁物、それとは別に煮物や山菜。今思えば、母子家庭といっても過言ではない状況で働き詰めの筈なのに、よくあれ程の質と量の食事を用意していたものだ。本当に頭が上がりたくない。きつと見知らぬ父も、母のこういうところを好きになったのだろう。

そして同時に、どうしようもないような理由で両親は別居しているのだろうかということも感じる。母に千葉から送り出されて、ここに住んでいるわけだが、年末年始以外にも母のもとへ帰省するべきなのかもしれない。金銭の心配をする必要のなくなった今なら、自由に帰ることができるとのだから。

「八幡、どうかした？」

「いや、なんでもない。それよりもうすぐモカ帰ってくるってよ」

「りょーかい！ そしたら——」

「ただいま。モカちゃんの帰還ですよー」

樽をすればなんとやら。玄関から明るい声が響く。帰ってきたモカの手には羽沢珈琲と印刷された紙袋があった。

「はい、いつもの」

「おう、ありがとな」

「ん？ 羽沢珈琲店にテイクアウトってあったっけ？」

「これはテイクアウトじゃないぞ、ほれ」

袋からいくつかの缶を取り出して見せる。中身は香りの良いアラビカ種とパンチというよりはボディの効いたロブス力種の豆だ。五日間の保存を目安にしているため、密封はされていない。今井に見せ

てやると興味深そうな顔をした。

「へえ、本格的だね。八幡はいつもこれで淹れてるの?」

「いや、今回頼んだやつは使ったことのない豆だ。羽沢さんに勧められたんでモカに貰ってきてもらった。カフェモカの 에스プレッソは苦いのが中心だが、こいつらで作るのは少し酸味の強いやつでな、これに合うトツピングを考えてみるって言われたんだ」

「そっか、つぐみのパパさんのコーヒー美味いからね。その試作品出来たら私にも飲ませてよ!」

「おう、モカに飲んでもらってOK出たら今井にも渡すわ。まずはモカの壁を越えねえとな」

「ふっふっふー、モカちゃんの舌は肥えているのです」

「知ってるよ。さて、飯にするか。モカ早く荷物置いてこい」

「はーい。リサさんのご馳走が楽しみだ」

三人で食卓を囲み、料理に手をつけ始めた。汁物や魚もうまいが、筑前煮が特にうまい。具沢山だからか様々な食感が楽しめる。隣を見てみるとモカも幸せそうに食べた。

「ふたりとも美味しい?」

「うん、おいしーです。リサさんは良いお嫁さんになりますなあ」

「ああ、流石だな。調理実習のときとかもそうだった気がするが、温かさを感じる。昔から誰かに作ってたのか?」

「ははっ、ありがとモカ。家族によく作ってたんだけど、八幡に温かさって言われると少し恥ずかしいね」

「なんでだ?」

「モカを見てると八幡の温かみをよく感じるからさ、アタシからしたら八幡は相当温かい人だよ」

「……俺も恥ずかしくなってきたわ。まあ、ありがとよ」

「むー、なんだかモカちゃん空気だ」

そういった団欒をしつつの食事が終わったとき、ついに今井が口を切った。

「あのねモカ、八幡。大事な話があるの。二人にも関わる大切なこと」「大事なことですか?」

「うん。……アメリカにいる私の幼馴染みが帰ってくるの」

「幼馴染み、今井にも幼馴染みがいるのか」

「まあ、最後に会ったのは小学校に上がるよりも前なんだけどね」

「でも、それがどうしてあたし達にも関係するんですか？」

「大事なのはここからだよ。その子の名前はね『湊友希那』みなとゆきなっていうんだけど、お父さんがアメリカでプロのバンドマンをやってるの。でね、そのお父さんのバンドメンバーの中に――」

一拍おいて今井の口が動く。世界がゆっくりと動いているのを感じた。今井の顔は少し青ざめていて、モカは無機質な表情で今井を見つめている。不味いかもしれない。あの人に培われた勘がそう言っていた。

「――比企谷って人がいるの」

ああ、やつぱりだ。モカの顔が悲壮に染まった。

「悪い、話の腰を折るが、この話をモカも聞く意味はあるか？」

「……あるよ。だって大切な人の、大切な話を後から聞くっていうのは大切な人にとって自分が大切じゃないって言われているのと同じだから」

「そんなこと「あるの！」」

「だって、だってさ、アタシがそうだった！ 友希那は言ってくれなかった！ アタシに何も言ってくれなかったんだよ!?! 友希那がアメリカに行ったことをアタシはどうやって知ったと思う？ 親からほんの一言『友希那ちゃん引越したんだってね』って、それだけだよ？ それだけだったんだ！ アタシは、アタシは友希那が大切だったのに。友希那は、何も言ってくれなかった」

今井の号哭が空間を支配する。今井が怒っているのも泣いているのも初めて見た。中等部の時のことは知らないが、少なくとも高等部に入ってから今井が泣いているのを見たことがない。こいつはきつと幼馴染みに対する怒りと悲しみで負の感情が満ちていたのだろう。だからその思いが今爆発した。

「ごめん、ちよつと熱くなり過ぎたね。顔洗ってくる」

「ああ、廊下の突き当たり、右側の部屋が洗面所だ」

「ありがとう、少し待ってて」

少し重くなつた足取りでリビングを今井が出て行くと、モカがもたれかかつて来た。

「今日さ、リサさんから電話がかかってきた時に嫌な予感がしたんだ。その時はリサさんとあたしのいないところで仲良くするのかつて思つて、それが嫌な予感だと思つてた。でも、三人でご飯食べるつてリサさんに言われてさ、たまにはあたしの予感も外れるのかつて安心してたのに、そうじゃなかった。ねえ、あたしつて大切な人？」

「当たり前だろ。じゃなきゃ、一緒に住んでなんかいいえよ」

「じゃあ一緒に聞いてもいいーい？」

「ああ、モカが聞きたいなら構わない。でも、いいのか？ モカは知つてたんだろ俺の父親のこと。何か理由があつて黙つてたんじやないのか」

「そつか、気付いてたのか。うん、知つてたよ。知つてて黙つてた。仮にもギターリストだからね。有名な人達は割と知ってるよ。リサさんと幼馴染みだったのは知らなかったけど、友希那さんだつて有名なシンガーだから知つてたし、もちろん比企谷さんのことも。知つてほしくないことはあるけどね、でもあのリサさんを見てたら止められなくなつちやつた」

儂げな笑みを浮かべるモカは諦めたような顔を向けてくる。嘘はついていない。ただ、まだ何か隠している、そんな気がした。

「おまたせー！ 落ち着いたし話戻すね。その比企谷つて人なんだけど、たぶん八幡のお父さんだと思ふんだ」

「……比企谷つて苗字は血縁以外で聞いたことがない。おそらく父親だろう」

「そつか、比企谷さんは友希那達と一緒に日本に帰つてくるつて聞いたよ」

「いつだ？」

「来週の土曜日だつて。八幡達もアタシと一緒に空港に来る？ 友希那達が日本に帰つてくる理由は知らないけど、空港で合流する予定な

「ただけど」

「いや、土曜は無理だ。外せない用事がある」

「わかった。モカは？」

「うーん、あたしだけ行っても意味がないと思うのでパスしまーす」

「りょーかい。それならアタシだけでも会ってくるよ」

「ところでリサさんはくなんでそのことを知ってるんですかー？」

「……友希那達がアメリカに渡ってすぐにね、友希那のお父さんが連絡をくれてさ、アタシと友希那を仲直りさせようとしてくれたんだ。アタシ今でも友希那のことになると、ああなっちゃうから結局断っちゃったんだけどね。それでも度々連絡してくれて、日本に来るって聞いた時に他の人達のことについても少し調べたんだ。それで、その中に比企谷さんがいたの」

父親のことは確かに気になるが、それでも自分から知ろうとは思わなかった。母の口から出ないのならば、まだ知る時ではないだろう。「一応聞くね。八幡がなんでモカと二人でここに住んでいるのかアタシは知らないけど、比企谷さんと、八幡のお父さんと会ってみる気はある？」

「態々教えてくれた今井には申し訳ないが、そのつもりはない。母さんから父さんの話を聞くまではなるべく会いたくないんだ」

「……そっか。じゃあアタシの話はもう終わりだよ。ごめんね、空気悪くしちゃってさ」

「気にすんな。今井もまだ幼馴染みと仲直りできてないんだろ。頑張れよ、そのために空港に行くんだろ？」

「……うん、ありがとう。モカもごめんね」

「リサさんはく謝ってばかりですよー。こういう時は暗くしちゃってごめんじゃなくてー、聞いてくれてありがとうと〜です」

「ははっ、そうだね。ありがとう、モカ！」

「今井、もう遅いから送ってく。モカ悪いけど風呂の準備頼むわ」

「は〜い、気をつけてねー」

「ありがと、八幡。それじゃあ家までよろしく☆」

「あいよ」

帰り道の途中、今井が何でもないように言った。

「ねえ八幡。あのマンション結構大きいよね」

「ああ、建てられてまだ新しいし、割と広いからな」

「……モカも八幡もバイトしてるけどさ、それだけであんな所に住めるの？」

住める訳がない。俺とモカの収入は合わせても十万ちよつと。あのくらいのマンションの家賃は八万を超える。到底払えるレベルじゃない。それでも俺達があそこに住めるのは――。

「バイト代だけじゃ無理だな。あそこに住めるのは――こころのおかげだよ」

「こころの？」

「ああ、そうだ。今井やモカに幼馴染みがいるように、俺にも二人幼馴染みがいる。そのうちの一人がこころだ」

「そうなの!? 全然知らなかったよ」

「モカくらいにしか言っていないからな」

「じゃあ、あのマンションってもしかして……」

「弦巻家の所有物だな。そもそも俺が羽丘に通えてるのもアイツのおかげだ。元々女子校だった羽丘が急に共学になっただろ？ あれはこころの親父さんが無理を通してくれたんだ。本当は花女に来て欲しかったらしいけどな」

「相変わらず、やることのスケールが大きいね。八幡のためにそこまですてくれたんだ」

「アイツは自分のためだつて笑つてたけどな」

寂しげな顔で笑っていた幼い頃のこころが、初めて俺達に見せた満面の笑みがそれだった。今でこそ奥沢や松原がいるが、あの時は俺とあの人しかアイツに寄り添える子供はいなかった。傷だらけの俺達には眩し過ぎたが、それ以上に笑うようになったアイツが嬉しかったことをよく覚えている。

「八幡って色々な経験をして生きてるね。アタシ知らなかったよ」

「俺だつて今井のことあんま知らなかったよ」

「三年間も同じクラスなのにね」

「しかも今は隣の席なのにな」

談笑もそこそこに今井の家に着いた。今井が隣の家を眺めて白い息を吐く。

「この家ね、友希那の家なんだ。来週比企谷さん達も来ると思う。もし、八幡のお母さんが帰ってくることを知ってて、会いたいわって連絡があったら教えてよ。アタシから比企谷さんに話しておけるからさ」
「ああ、そのときは頼む」

「うん、送ってくれてありがとね。明日は土曜日だから、また来週だね。バイバイ」

「おう、また来週。それと身体冷えてるだろうから暖かくして寝ろよ。もう四月だけど風邪引くぞ」

「はいー！」

空に浮かぶ月が白く輝いている。きっと明日飲むカフェモカはいつもより甘いだろう。家に帰って、玄関で寝てしまっているモカの顔を見て笑った。寝室にモカを運んで風呂に入る。父親のこと、このこと、モカのこと。考えることはいっぱいあったが、何にしてもモカさえいればどうにかなる、そんな気がする。

キッチンに立って明日の珈琲の準備を始めた。毎週水曜と土曜はこころとあの人の三人で会う日。俺もあの人もこの日は必ず予定を開けてこころに会いに行く。五年以上続くこの習慣はあの日の教訓から生まれた。モカもこころも孤独にさせてはいけない。After glowがてきたって、ハロハピができたって、俺達の孤独が埋り切れることはなかったように、二人の孤独だってなくなりはしないのだから。

モカの眠るベッドに入り、そっと抱きしめる。今井に感化されたのかもしれない。モカを離したくなかった。

「モカ、愛してる」

「……えへへ、モカちゃんも愛してるよ」

その返事が単なる寝言だったのか、それとも起きていたモカからの返事だったのかはわからない。それでも微睡みに沈んでいく意識の

中で確かにモカの微笑む顔が見えた。

彼女は「彼」に笑みを浮かべる

美しいという言葉はこんなにも排他的なのか。

特徴的なアホ毛と鋭い目つきを携えた眼鏡の男の人と肩のあたりで整えられた髪、それと抜群のスタイルを持った、まるで男性の理想を表したかのような女の人を見て、そう思った。

食事の所作の一つひとつからさえ色香を醸し出す男女の姿に何とも言えない緊張を感じる。二人とも一応の面識はあるはずだ。それにもかかわらず、この二人からは自分達以外は空気と言わんばかりの様子を見せられている。どうしてこんな事になっているのだろうか。こつそりとため息を吐きながら、あたし——奥沢美咲——は給仕としてコース料理を運んだ。

まだ日も上りきらない時間にモカと寝ていたベッドから降りてキッチンに向かう。四本の水筒に昨日用意した珈琲を注ぎ、そのうち三本を鞆に入れる。自室に掛けてあったオーダースーツに身を通し、髪を整えて、眼鏡を掛ければ、準備は完了。

午前六時、マンションの駐車場には黒塗りの高級車が停まっていた。

「陽乃、お待たせしました」

「……うん、及第点。大丈夫だよ、八幡。そんなに待ってないから」

「それなら良かったです。黒服さんも毎回ありがとうございます」

「いえ、お気になさらず。これも職務ですから」

「さ、乗って八幡。今日もこころと過ごしたらウチに来てもらうことになってるから」

弦巻家の使用人、通称『黒服』さんの運転で幼馴染みの家に向かう。車内では影を纏った陽乃が凍てついた目で外を眺めていた。珍しく、初めから気の抜けた状態らしい。

「八幡、今日は雪乃ちゃんやんがウチに帰ってきてるから仕事の合間に会ってもらってもいい？」

「いいですよ、本人からの希望ですか？」

「うん、勉強を見て欲しいんだって」

「それはまた随分と下手な誘い文句ですね」

「本当にね。雪乃ちゃん不器用だから。……羨ましい限りだよ」

皮肉げに見える笑みを浮かべる陽乃。どうやら狐が仮面を啜えて帰ってきたようだ。

「つくならもつとマシな嘘をついてください。今更貴女が雪乃の不器用さを羨ましがるわけがないでしょう」

「ありや、バレたか。まあそーだね。見抜けなかったから教育し直してあげようかと思ってたけど、腕を上げたね可愛いかわいい八幡お弟子さん」

「おかげさまでですよ、優しい振りをした陽乃」大魔王さん

談笑もそこそこに、車が門をくぐり抜ける。玄関では見覚えのある少女と共に満開の笑顔を咲かせるところが待っていた。

「おはよう！ 八幡も陽乃も元気そうね、良いことだわ！」

「おはよう、こころ。土曜に会ったばかりだけどな。それでなんで奥沢までいるんだ？」

「それはね、陽乃にお願いがあるからよ！」

「こころが私に？ どんなお願いかな？」

「今日一日、美咲をメイドさんとして雇って欲しいの！」

こころから俺や陽乃に直接頼み事をすることは今までほとんどなかった。大抵のことは黒服さんの仕事だし、こころの願いの多くは周りが勝手に汲み取る。幼い頃と週二回の約束を踏まえてこれが三回目のことだろう。にしても、また随分と趣旨の読めないお願いだな。「んー、こころのお願いだから受けてあげたいけど、どうしてその子を私に雇って欲しいの？」

「それは—— になるからよ」

「……ふーん、いいよ。受けてあげる。そのかわり今度は三人で旅行に行こう？」

「ええ、わかったわ！ ありがとう陽乃！」

こころが陽乃の耳元で理由を告げると、陽乃は起伏を感じさせない声で承諾の旨を伝えた。そして陽乃に抱きつくこころ。たいへん仲

が良く、微笑ましい光景なのだが、どうやら、その交代条件に俺の都合は一切考慮されてないようである。たとえばクラスカースト上位に立とうが幼馴染み三人で集まればこんなものだ。奥沢から寄せられる視線にも哀れみの色が籠っていた。お前だつてもうそんな他人事じゃないんだかな。

「それじゃあ美咲ちゃんだっけ？ 着替えてきてね。フリフリのメイド服を着てくれればいいから」

「えっ？ ちょマジですか」

「奥沢、諦めて着替えてこい。こうなつたら陽乃の言う通りにしておくのが一番マシだ」

「それでは美咲様、こちらへお越しく下さい」

流れるように屋敷へ連れて行かれる奥沢。隣で完璧な笑みを浮かべている陽乃に、こころが何も言わないということから割と楽しんではあるのだろう。手間隙楽しめるのが陽乃の強みだ。その分周りの人間も手間隙の被害を受けるわけだが、まあ最低限の助言はしてやっただし、恐らく雪ノ下家に行つても死にはしないだろう。……精神的なものまでは知らないが。

「陽乃も八幡も中で待っていきましょう！ 八幡の淹れてくれたコーヒーが楽しみだわ！」

「今日はどんな風味？」

『ヴェルデイススペシャルティコーヒー』を参考にしたほろ苦い感じのです」

「それは良いね。ちょうど『ランタイン』の『とりいさん家』から甘いケーキ持ってきてるから一緒に食べよっか」

徒歩数分かけて俺と陽乃用になってる応対室へ着いた。黒服さん達からカップを受け取り、持参した水筒に入っている珈琲を注ぐ。魔法瓶によって保たれた温度は飲むのに丁度いい加減だ。机の上に珈琲とケーキを並べる。食前の礼をして、こころが手を伸ばした。

「ん、コーティングされてるキャラメルのパリッとした食感と中のケーキの柔らかい口当たりがとっても美味しわ！」

「うん、珈琲との相性も抜群だ。持ってきてよかったね」

「美味しいな、このケーキ。今度買いに行くか」

三者三様に堪能していると応接室の扉から控えめなノックが聞こえ、こころが返事をし、中に入るように促す。姿を現したのはフリルが控えめにあしらわれたロングスカートのメイド服を着た奥沢だった。髪もまとめられ、おそらく化粧も変わっている。普段のダウナーな高校生から、きつちりとしたメイドといった雰囲気に変化しているが、いかんせん普段の奥沢を知っているからか、それとも姿勢などに問題があるのか、服に着られている感覚もある。

「美咲！ 似合っているわ！ 可愛いわね！」

「落ち着かないか？ 慣れない格好で羞恥を感じてるのかもしれないが、こういうときこそ背筋を伸ばした方がまともに見えるもんだぞ」
「ううう……、ありがとうございます」

奥沢も抵抗することを諦めたな。一年以上このころと付き合っれば、楽しんでた方がマシだって気づくか。……だからといって俺がメイド服を着ると言われても絶対に着ないが。

さて、本日のご主人様となる陽乃はどう反応するのか。陽乃は奥沢が入ってきてからじつくりとその鋭利な双眸で奥沢、というよりはその服を見つめている。雪ノ下家に来るのに弦巻家の服では都合が悪いのだろう。だから態々フリフリなんて言っていたわけだろうが、普段からメイド服を利用していない弦巻家だと、この服ではグレーといったところか。陽乃は灰色をどう扱う？

「うーん赤点だね。黒服さん、カチューシャつてありますか？」

「はい、あります」

「ありがとうございます、それじゃあ美咲ちゃんおいで」

恐るおそる美咲が近づくと、陽乃は美咲の髪にカチューシャを差し込んだ。控えめにフリルがあしらわれたそれは見た目に反してチープなものだろう。とはいえ、全体の雰囲気は損なわないのは流石陽乃といったところか。

灰色はやがて黒になる色が、白にもできる色だ。つまりは使い手次第。こと、何かを使うことにおいて完璧に近い陽乃は灰色を使いこなしてみせた。

「これで及第点だね。じゃあ美咲ちゃんは今日一日この格好で過ごして」

「……はい」

「奥沢、色々と諦めてるとこ悪いが、帰り遅くなるって家に連絡入れとけ。千葉の方に行くことになるから移動だけでもそれなりにかかるぞ」

「それじゃあ、ちよつと連絡入れてきます」

「私も家に連絡入れてくるね、雪乃ちゃんに何か伝えたいことはある？」

「それでは、You cannot look at me because your eyes are shining. だけ」

「優しいだけの男は嫌われるよ？ 女を落としたいなら適度にクズでいなきゃね」

「生憎、大切なものを一つだけ持ち続けられれば勝ちなので」

「敗北と後悔しか知らなかった少年が言うようになったね、やっぱり腕を上げたんじゃない？ プチョヘンザも程々にしないと撃たれちゃうけど」

「八幡も陽乃もそこまでよ。美咲が部屋から出られないわ」

「ありやいや、ごめんなさい」

鶴の一声で言葉遊びが終わる。二人が部屋を出ると、ところが眩い笑みを向けたてきた。随分と自然に笑うようになったものだ。

「二人とも相変わらず楽しそうね。でも、私達を忘れちゃ嫌よ？」

「……出会ったあの日から俺達がここを忘れたことなんてないし、こころがゲームに勝ってから奥沢のことを忘れたこともねえよ」

「ふふっ、私は一度負けただけど美咲のおかげで勝ったわ。陽乃はタイムオーバー時間切れで負けだと言った。八幡、アナタは？」

慈愛に満ちたその顔から孤独が抜けたのは奥沢のおかげだ。幼馴染み三人で始めたゲームは周囲の人間を巻き込んで広がっていった。いや、拡げなければならなかった。孤独を飼いならすことが負けを意味するゲームだ。仮面を被る陽乃は素顔を忘れて独りを当然のもの

とし、寂しさを恐れたこころは独り楽しさを求めた。そして俺は——
「——まだ負けてない。俺は陽乃のように仮面を纏い、こころのように仲間を求めた。そうして三つ可能性を見つけている」
「勝てるかしら？」

「わからない。少なくとも簡単じゃない」

「八幡は勝てると思ってる？」

「信じてはいない。だが信じたいとは思っている」

「勝ちたいと思ってる？」

「ああ。こころが見た景色を三人で見たいと思っている」

「それなら魔法の言葉を教えてあげるわ」

太陽の色をした深海が俺を見つめる。

「ハッピー！ラッキー！スマイル！イエーイ！ 世界を笑顔にする絶対最強の言葉よ」

いつもの眩しい笑顔じゃない。懐かしさすら感じる深い深い暗闇が覗く笑顔が、そこにはあった。

応接室の窓から光が差し込む。珈琲からはまだ湯気が伸びていた。

こころの家から数時間、黒塗りのリムジンは雪ノ下家に着いた。車内には運転手の黒服さんを除いて陽乃と奥沢と俺の三人しかいない。こころはこの後やることがあるそうだ。

「はい、着いたよー。降りた降りた」

事前に陽乃から指示されていたように、まず奥沢が車を降りてドアを開ける。外に出た瞬間から陽乃と俺は雪ノ下家の人間とその客人として振る舞い、奥沢は陽乃の世話役として振る舞う。おそらく奥沢の人生史上最大の職場体験が始まった。

「八幡、雪乃ちゃんはいつもの部屋にいるから向かってもらって良いかな。この娘と会わないように部屋で待ってもらってるからさ」

「了解しました、それではまた昼時に会いましょう」

「それとあの言葉、雪乃ちゃんに伝えちゃったから頑張ってね」

雪ノ下邸の大広間から、悪戯をするような顔で笑う陽乃に手を振って返事をし、二階の奥にある雪乃の私室に向かう。奥沢は別れ際だけ

頭を下げて、それ以外では会話に参加しない。顔を見る限り、俺たちの変化に戸惑っているのかもしれない。弦巻家と違って雪ノ下家では気を抜く暇などない。雪ノ下家では全て人に見せる、見られることを前提として過ごさなければならぬのだ。それは雪ノ下家の気質でもあるし、教育方針でもある。そこに例外はない。一見、お転婆に見えるころですら、ここでは礼儀を徹底する。

雪乃の部屋の扉の前に立ち、左で三回ドアをノックする。中から入室を許可する声が聞こえた。随分と可愛らしく拗ねた声だ。

「久しぶりだな、雪乃」

「久しぶり、八幡君。ところで三回ノックをしたのにあんな言葉を送ってくるなんてどういうつもりかしら？」

You 君 cannot はずは 輝 過 look at me まで
because 僕 を 見 える your eyes とも は are でき shining ない
なんて」

「お前に贈る言葉なら英語の方が良いと思ったんだが、気に入らなかつたか？」

「そんなことは聞いてないわ。私が言いたいの——」

「——」 A secret makes a woman woman.
an.” 感情に任せて想いをぶちまけるもんじゃやないぞ。秘密がなくとも美しいやつなら尚更な」

「……八幡君、姉さんとは違った方向で苦手だわ」

溜め息を吐く姿が似ているなんていうと怒られるだろうが、雪乃は陽乃の妹にしては色々と未熟であり、そこが魅力だ。遊ぶのなら自分優位の方が俺の好みに合っている。とはいえ今日は遊び過ぎた。反省して本題へ移ろう。

「勉強を見て欲しいんだろ？ 教科は？」

「国語と数学よ」

「国語はともかく数学も俺に聞くか。まあ良い、いつも通りわからないうところがあつたら聞いてくれればいい。本、借りるぞ。後ろで読んで待っているから」

そして本の世界、新しい価値観の塊である毒と日常の痛みを薄める

薬の中へと入っていく。ペンを走らせる少女の笑みは止まらない。
物語まだ始まったばかりだった。